（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和６年度　海外派遣研究員研究報告書

令和６年 10 月１日

日本大学理事長　　殿
日 本 大 学 学 長　　殿

所　　属　　文理学部（人文科学研究所）
資格・氏名　　教授・高榮蘭
■本報告書の内容を公表することは了承しております。
（公表可の場合，チェック■すること）

令和６年度海外派遣研究員（短期 B）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　短期 B
２　研 究 課 題

帝国日本の出版検閲とコロニアルアーカイブズをめぐる知の再構築に関する研究

３　派 遣 期 間　　西暦　2024 年　７月２３日　～　2024 年　８月　21 日
４　派　遣　先　　米国・シカゴとニューヨーク
５　研 究 目 的

帝国日本の時代をめぐる研究は、帝国の文書庫（Archives）によって支えられてきた。本研究は、この文書庫が①日本の敗戦、引揚、占領により旧植民地や占領地に放置され、②GHQ による日本占領の過程で欧米まで拡散されており、その全容が把握されていないことに注目したものである。特に、本申請で、シカゴ大学図書館を拠点に選んだのは、日本の占領期研究に大きな貢献をした奥泉栄三郎が主任司書を長年勤めたからである。奥泉がメリーランド大学図書館に勤めていた時期、江藤淳を占領研究に導き、『閉ざされた言語空間』が書かれたことは有名な話である。奥泉は 1985 年からシカゴ大学に赴任しており、本研究の協力研究者であるシカゴ大学 Kyeong-Hee Choi 教授に出会っている。Choi は奥泉と植民地朝鮮の検閲に関する共同研究をスタートさせ、奥泉はソウルで開かれた検閲会議で発表も行っている。二人の共同研究はシカゴ大学のアーカイブズのあり方を変える結果を生んだ。今回の調査の成果は、Kyeong-Hee Choi と執筆中である朝鮮半島で、朝鮮語検閲を担当した、日本人の検閲官に関する共著を通して、日本語・韓国語・英語で発表する予定である。

６　研　究　概　要

近年最も注目を集めた、ピーター・スコットの研究グループによる公文書庫の相互関係に関する議論は、アーカイブズを作る側を多元的に捉えるものである。スコットは記録とそれを作成した行政（単位）が、不断に変化し続けるという多様な相互関係にあること、それが記録管理の連続体（記録を作成する主体・記録を管理する主体・公文書庫など）が見られるあらゆるところに存在することを明らかにした(Terry Cook. What is past is prologue, *Archivaria*,Vol.43,1997)。旧植民地で膨大な国家資金が投入されて作られたコロニアルアーカイブズの場合、独立以降厳しい独裁政治が続いた「韓国」や「台湾」においては、政治的な状況の激しい変動がもたらす、記録管理の連続体のブレ（支配イデオロギーにそぐわない主体は排除され、アーカイブズは抹消か配置変えが行われる）によって、政権が変わるたびに、記録としての承認自体を問い直す作業が繰り返された。それは「戦後」を前面に出すことによって、コロニアルアーカイブズに対する忘却と無関心を貫いている日本語空間と対になる構図である。アメリカにある資料を主な対象とするGHQ占領については、検閲に関する資料の収集と日本視点からの再アーカイブ化が、日本が如何に「植民地化」されていたかという文脈で、積極的に行われてきたことと合わせて考える必要がある。このような構図の支えの一つが東アジアの冷戦構図である。そのため、本研究のように、日本帝国による朝鮮半島や内地での検閲資料もあわせて検討する必要がある。コロニアルアーカイブズについて考える本研究では、冷戦とポスト冷戦が生み出す遠近法も相対化する必要がある。本研究はシカゴ大学の研究者および図書を専門的に扱いライブラリアンとの連携を通して、東アジアの知の再構築に繋がる議論を生み出すことを目的とする。

朝鮮半島の米軍占領、敗戦後のGHQ占領、朝鮮戦争の期間中に多くの植民地支配関連の資料がアメリカに一散している。しかし日本の場合、それは朝鮮学のものであると扱い、韓国の場合、それは日本帝国の資料であると扱い、調査対象としなかったものが多いことに気づいた。またアメリカは日本帝国の亡命者が作った組織が活動していた場所であり、それに関する資料の整理も十分できていない。このように、アメリカで無秩序に拡散した資料を調査するためには、本の移動や収集、整理を専門的に行なっているライブラインとの共同研究が必要である。コロニアルアーカイブズの頂点に君臨していた図書館の調査を、ライブラリアンと共同で、検閲資料と照らし合わせながら行うことによって、帝国日本の知の形成を捉え直すことができるだろう。

７　研究結果・成果

シカゴ大学の Kyeong-Hee Choi 教授とは、植民地にいた日本人の朝鮮語検閲官に関する本を執筆するために共同研究を続けている。

１ 研究調査について：シカゴ大学の Kyeong-Hee Choi 教授との共同調査

今回の海外派遣研究員としてシカゴに滞在したのは、これまで行ってきた以下の Kyeong-Hee Choi 教授との共同研究をさらに深めるためである。

2023 年 7 月 26 日（水）から 8 月 21 日（月）まで、シカゴ大学 Department of East Asian Languages and Civilizations の招聘をうけ、滞在した。その期間中に、シカゴ大学で Kyeong-Hee Choi（研究チームリーダー）、Nick Ogonek（日本関連の検閲資料を担当）と共同研究チームを作った。

その研究成果の一部は、2024 年 5 月 11 日に、私が研究代表者を務めている JSPS 国際共同研究加速基金(海外連携研究、課題番号：23KK0006)と韓国成均館大 BK21 教育研究団との共催による国際会議で「朝鮮語メディアにおける統治技術の媒介者・通訳官の研究１」というタイトルで行った。この発表をさらに深めるために、2024 年 6 月 3 日から 16 日まで、東京で以下の三つの点に軸を置きながら共同研究を行った。①5 月の発表を元にした原稿を執筆した。②本研究には日清・日露戦争期において朝鮮語通訳を養成していた熊本国権党と（現在の）東京外国語大学に関する資料が必要である。熊本の調査は、2023 年 12 月に行っている。その資料の整理を行った。③東京外国語大学、国会図書館、日本大学文理学部図書館、早稲田大学図書館、徳富蘇峰記念館で、日清戦争から日露戦争のあいだに朝鮮語通訳がどのような形で教育されていたのかについて調べた。

シカゴ大学では、Kyeong-Hee Choi 教授とともに、上記の①から③までの作業を続けるとともに、ニューヨークのコロンビア大学の図書館に所蔵されている資料も調査した。Kyeong-Hee Choi 教授は『朝鮮出版警察月報』を発見し、植民地出版検閲に大きな貢献をしたことで知られている。彼女が、この資料を発見したのは、韓国の国立中央図書館である。すなわち大切な価値のある資料は、どこか秘密な場所に隠されているわけではない。図書館の本棚に並べられているにも関わらず、研究者の内向きの思考が死角を作ってしまい、認識されないまま放置されている可能性も高いのである。

ただ、今回は一ヶ月という短い滞在に立ったので、シカゴ大学の図書館の資料を網羅する形で調査を行うには限界があった。そのため、朝鮮総督府や内務省の検閲資料、GHQ 占領時代の検閲資料の中から、とりわけ朝鮮語が堪能であった日本人検閲官が作成した朝鮮語の資料、日本語が堪能であった朝鮮人検閲官が作成した日本語の資料、日本と朝鮮の現代史があまり注目しなかった朝鮮人や日本人の亡命者の抵抗運動に関する資料と関連のあるものを中心に調査を進めた。

（ 様式D－２ ）

２ 英語・日本語・韓国で執筆中の論文の新しい方法論について

方法論的な面で、この共同研究の特徴は『朝鮮出版警察月報』など調査対象となっている歴史的な資料をただの官僚組織の報告書として捉えるのではなく、そのシリーズ的な特徴およびその構成様式そのものをジャンル的な特性として扱いながらアプローチすることである。いわゆる「クローズリーディング」という方法を試みている。文学を情報や言説の束としてではなく、作品が持つ形式的な全体性を念頭に置いてアプローチするのと同様に、個々の新聞記事の次元からメディアやテキスト、出版物の全体性に至るまで、そこに含まれる内容や情報データを、それらが提示された形式との関係に注目し、形式主義的に弁証法的に把握するためのものである。

特に帝国の地方と中央との関連性を明らかにすることができる研究対象を模索し、特に検閲とメディア学の領域において、その重要性と意味があるにもかかわらず、あまり注目されてこなかった研究対象を探すうちに、日本人の朝鮮語通訳という人物群が視野に入った。朝鮮語と日本語の境界を恒常的に行き来しながら公的、社会的役割を果たしていたこれらの人物群は、卓越した朝鮮語の能力の持ち主である。これまでの帝国日本時代の研究は日本語が堪能な朝鮮人や台湾人には注目してきたが、朝鮮語が堪能な日本人が植民地経営に果たした大切な役割について注目されてこなかった。このような調査を積み重ねていくことによって、これまであまり注目されることのなかった、日本帝国時代の朝鮮語検閲官や通訳官たちの役割を明らかにし、「帝国と植民地の官制ネットワーク形成」という新たな学問的な問いを作り出すことができると期待している。

３ 研究成果をどのように公開していく予定なのか

① Kyeong-Hee Choi 教授とは、2026 年前期に、国際会議 “comparative censorship studies in colonial Korea and imperial Japan（仮）“を、シカゴ大学で開催するために調整を続けている。今回の共同研究の成果は、その会議で発表する予定である。その後、英語・日本語・韓国語で出版する予定である。

② また、共同調査以外にも、私が個人的にシカゴ大学で行った検閲を媒介とする日本学の人文知の再編に関する調査については、2025 年 2 月 21 日にプリンストン大学で開催される予定の国際会議で発表する予定である。また、プリンストン大学の会議での発表原稿は、Routledge 出版社を通して英語圏で公開される予定である。

以　上